

天平びとの声をきく―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて

展示期間 I 二〇一〇年 九月二五日(土)―一〇月一日(月)

解説シート 付録

II

一〇月一三日(水)―一〇月二五日(月)

III

一〇月二七日(水)―十一月七日(日)

【木簡が見つかった遺構】

(遺構番号順。年は展示木簡の出土年で、その遺構の全ての調査年を示すものではない)

SK二九 (第一室3、第四室271)

重要文化財 一九六一年

平城宮中央区の第一次大極殿院の跡地に建てられた西宮の北側に展開する役所のゴミ捨て穴。東西二m、南北二・五m、深さ一mの北半と、東西三m、南北二・五、深さ一mの南半分とからなる。平城宮跡最初の木簡出土地として名高い。天平宝字末年頃(七六〇年代前半)の遺物を中心とする。この遺構出土の木簡群は、同じ役所内の井戸SE三二一出土の木簡とともに、平城宮跡大膳職推定地出土木簡として、二〇〇三年に木簡では初めて重要文化財に指定された。

SK八二〇 (第二室13、17、117、119、第三室130、171、第四室270、273、281、283、291、299、304、315、319)

重要文化財 一九六三年

内裏の北東に位置する北外郭官衙西辺に掘られた方形のゴミ捨て穴。一辺約四m、深さ約二・三m。七四五年の平城遷都後のこの地域の再整備に関わるゴミを投棄した土坑で、七四七年(天平十九)頃に埋められたとみられる。平城宮跡で最初に千点規模の木簡群が見つかった遺構。平城宮跡内裏北外郭出土木簡として、二〇〇七年に重要文化財に指定されている。

SD一七〇〇 (第二室111、第三室135、第四室276)

一九六五年

平城京の北東に位置する水上池の南西部に端を発し、内裏東辺を南流してその排水を集める基幹排水路。上端幅二・六m、下端幅約〇・七m、深さ一・五m。内裏東辺では石の護岸をもつが、それより南では一部に木杭による護岸がみられる程度となる。東区朝堂院・朝集殿院東辺の東方官衙のどこかの地点で東に折れ、SD三四一〇に接続していたとみられるが、その地点は未詳。内裏周辺では、天平期以降の多量の遺物が層位的に堆積していることが知られている。

SD三〇三五 (第二室28、32、113、114、第四室269、272、278)

一九六五年

造酒司の井戸の排水を流すために役所の西辺に位置をずらしながら何度か掘られた南北溝の一つ。幅約〇・七m、深さ約〇・二m。南端は造酒司南限の築地塀を暗渠で抜けて宮内道路の側溝に接続する、敷地内では奈良時代を通じて淀み状に広がり、ゴミも投棄されて湿地状を呈していたとみられる。

SD三〇五〇 (第二室115)

一九六五年

造酒司の井戸からの南北方向の排水溝。二時期の溝が重複する。上層の溝は幅約八〇cmで、下層の溝は幅約五〇cm。上層の溝から、宝龜元年(七七〇)の紀年を持つ木簡が出土しており、奈良時代末期まで機能していたと考えられる。

SA二〇九九 (第四室277)

一九六五年

東院地区の西辺付近の南北掘立柱塀。東院の西限区画との関連性も想定される。掘形埋土から木簡が出土した。

SD三二五四 (第二室116、第三室137、170)

一九六五年

東院西辺北部を北東から南西に斜行して流れる素掘りの溝。幅二・四m、深さは約〇・四m。西端で素掘りの南北溝SD三二五五に接続し南流する。

SD三二五四付近整地土 (第二室116、第三室137、170)

SD三二五四付近には三層の整地層がみられる。

SA二二七八 (第二室109)

一九六五年

東院地区西辺付近の東西掘立柱塀。ほぼ同じ場所で数時期の塀が作られる。掘形埋土から木簡が出土した。なお、この遺構は本年の調査で再検出している。東院地区周辺の遺構は、こうした調査の進展にともなって、理解が変わる可能性もある。

SA三三〇五 (第二室110)

一九六五年

東院地区西辺の西側に隣接する区画内の南北掘立柱塀。柱掘形は不揃い。

SK三三三三 (第二室129)

一九六五年

東院地区西辺の西側に隣接する区画内の土坑。平面は一辺一・一mの方形を呈し、検出面からの深さは約〇・四m。埋土は有機物を多量に含んだ腐植土で、木簡の他箸などの木製品も出土した。

SD三三三六 (第二室160)

一九六五年

東院地区西辺の西側に隣接する区画の、西側の南北溝。SD三四一〇(後述)の東約一七mに位置する。二回の改修が行われ、三時期ある。古い溝は、幅約二m。中期の溝は幅約二mで、両側に杭をうつ。新しい溝は、幅約一・二m。それぞれの溝埋土の出土遺物には顕著な時期差はみられない。

SA三三六一 (第二室128)

一九六五年

東院西辺の斜行溝SD三二五四の西に位置する東西棟建物SB三三二二の北を画する東西塀で、一〇間検出した。木簡は檜皮が充満した柱掘方から出土した。

SD三三三〇・SD三三三三 (第四室292、297)

一九六六年

SD三四一〇は、平城宮跡東院と東方官衙の間の宮内南北道路の西側溝。幅三、四m、深さ〇・五m。小子門以南は東面大垣内側(西側)に沿って流れ、宮東南隅で西から東西溝SD四一〇〇を合わせたあと、南面大垣を暗渠で抜け、二条大路北側溝SD一二五〇に合流する。2252が出土したのはこの付近。SD一二五〇は、SD三四一〇との合流後さらに東流し、東面大垣東側の東一坊大路西側溝SD四九五に注ぎ込む。複数の溝が錯綜するこの付近は、平城宮東部の排水が集まる地域であり、上流部から流れ下ってきたものも含まれる。従って、有数の木簡出土地になっている。

SD四一〇〇 (第二室41、44、第三室162)

一九六六年

平城宮東南隅の南面大垣内側を東に流れる東西溝。幅最大六m、最深一m。東面大垣内側の南北溝SD三四一〇に合流する。木簡は、式部省の勤務評定に関わる削屑が大半で、養老・神龜年間(七一七〜七二九)から宝龜元年(七七〇)のものまでを含むが、養老・神龜年間のもものは南面大垣を横断する南北溝SD一二六四〇と一連の遺物とみられ、SD四一〇〇の木簡は基本的に宝龜元年頃に一括して投棄されたとみられる。なお、宝龜年間頃に北側に移転してきたとみられる神祇官関連木簡も、僅かに含まれる。

SD四七五〇 (第一室61、68、第三室136、158、159、161、第四室280、282、285、286、293、294、302、306、314)

長屋王家木簡 一九八八・八九年

平城京左京三条二坊一・二・七・八坪で見つかった左大臣長屋王の邸宅のうち、八坪東南隅に東面築地塀の内側に沿って掘られた南北溝状のゴミ捨て土坑。幅三m、深さ一m。総延長は約二七・三m。平城遷都からまもない時期の、貴族の家政機関の資料という他に類例のない木簡が出土した。長屋王が式部卿を務めていた七十六年(靈龜二)後半の、邸内における米支給の伝票木簡を主体とする。

SD四九五二 (第四室289)

一九六七年

東院西辺の排水を集める溝で、小子門の西側から宮外へ出て、東一坊大路の西側溝となる。幅一・三m、深さ〇・九m。二条大路北側で西から流れてくる二条大路北側溝SD一二五〇を合わせ、さらに京内を南流する。京内の道路側溝としては最も多くの木簡が出土しており、宮近辺だけでなく、七条でも千点規模の木簡の出土が知られる。242は、小子門の脇を通って宮外へ流れ出た、平城宮東面の東一坊大路西側溝部分から出土した。

SD五一一〇 (第二室82、第四室274、275、288、290、301、303、304)

二条大路木簡 一九八八・八九年

平城京左京三条二坊八坪(光明皇后宮。旧長屋王邸)と二条二坊五坪(藤原麻呂邸)の間の二条大路上の南北両端に掘られた濠状の遺構のうち、皇后宮の北門から八坪北辺築地塀に沿って二条大路南端に掘られた遺構。幅一・六m、深さ〇・九m。総延長約二二〇m。

SD五三三〇 (第一室83、84、85、86、第三室163、165、第四室284、287、295、296、298、300)

二条大路木簡 一九八九年

平城京左京三条二坊八坪(光明皇后宮。旧長屋王邸)と二条二坊五坪(藤原麻呂邸)の間の二条大路の南北両端に掘られた濠状の遺構のうち、藤原麻呂邸南門前から東に二条大路北端に沿って延びる遺構。幅二m、深さ一m。総延長約五八m。西端の門前から、藤原麻呂の家政機関に関わる木簡が集中して見つかった。

SD五三三〇 (第二室81)

二条大路木簡 一九八九年

平城京左京三条二坊八坪(光明皇后宮。旧長屋王邸)と二条二坊五坪(藤原麻呂邸)の間の二条大路の南北両端に掘られた濠状の遺構のうち、藤原麻呂邸南門前から西に二条大路北端に沿って延びる遺構。幅二〜二・七m、深さ一〜一・三m。総延長約六m以上。東端はSB五三二五の西四mで、西端は調査区外。

